

2025年大阪・関西万博 オランダパビリオンの セカンドライフ(再活用)



プレスキット - 2025年10月



Netherlands



Introduction

2025年5月20日、AND B.V. と株式会社パソナグループの間で、後者が2025年大阪・関西万博のオランダパビリオンを購入し、兵庫県の淡路島へ移設するための基本合意が締結されました。パソナグループは、万博終了後数か月のうちに売買契約を締結し、オランダパビリオンを正式に取得する予定です。

本プレスキットでは、サーキュラリティ(循環性)に関するオランダおよびパソナグループの志について、世界中のジャーナリストの皆さまに最新情報をお届けします。また、パビリオンの背後にある理念とパソナグループの理念が、どのように一致しているかを掘り下げ、この循環型構造にとって淡路島での取り組みが優れた行き先である理由を示します。詳細なお問合せは、下記Eメールまでご連絡ください。

Media-NLExpo2025@minbuza.nl

www.NLexpo2025.nl

www.OrandaExpo2025.nl



@NLexpo2025



OFFICIAL PARTICIPANT

基本情報

オランダの万博参加の中心コンセプトは「コモングラウンド(共創の礎)」です。これは、集団で問題を解決するという姿勢を表し、何世紀にもわたってオランダが培ってきたものです。オランダは国土の大部分が海面下にあるため、常に水害と向き合い、それを克服するために協力してきました。現代においても、私たちは単独では解決できないグローバルな課題に直面しています。オランダは他の国々と協力し、アイデア、専門知識、革新技術を共有することを提案します。

また、このテーマは、日本とオランダの 425年にわたる関係を祝うものでもあります。オランダが日本と共通の基盤を築いたのは、今から 4世紀以上も前のことでした。

オランダパビリオンでは、来場者は一人ひとり「オーブ」という球体のインタラクティブデバイスを用いて、パビリオン内のさまざまなインスタレーションと対話しながらパビリオン内を巡ります。このパビリオンは、循環型のコンセプトに基づいて設計された、オープンな交流の場です。ここでは、人々が革新的なアイデアや専門知識を共有し、新たなコラボレーションを生み出すことができます。再生可能エネルギー・循環型経済、ライフサイエンス・健康、農業食品・園芸技術、デジタル技術などを軸にした未来のライフスタイルを探求します。さらに、アートとデザインが、よりスマートな解決策につながるイノベーションをどのように生み出すのかを紹介します。

オランダパビリオンは、2025年大阪・関西万博の「Saving Lives District(セービングゾーン)」に位置しています。RAU architects、デザインスタジオ Tellart、エンジニアリング・コンサルタント DGMR、日本の建設会社である浅沼組で構成されるコンソーシアム A New Dawn(AND) B.V. によって建設されました。2025年5月20日、大阪・関西万博において、コンソーシアム AND B.V. は万博終了後にオランダパビリオンがセカンドライフを与えられることを発表しました。AND B.V. と日本の多国籍企業であるパソナグループの間で、パビリオンを淡路島へ移設するための基本合意が締結されました。



Copyright: AND BV | Zhu Yumeng

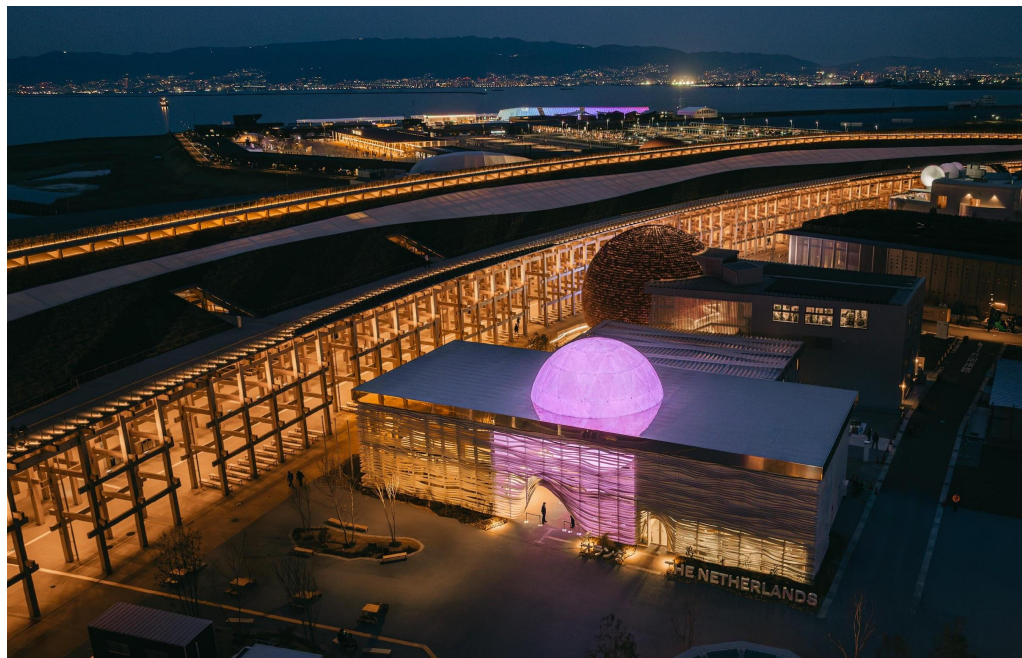
オランダパビリオン



エネルギーは私たちのあらゆる活動に欠かせないものであり、中核であるといっても過言ではありません。現在、世界は二つの緊急課題に直面しています。それは、資源の不足と化石燃料への依存からの脱却です。地球は外部から新たに資源が供給されることのない、閉鎖的なシステムであるからです。

サーキュラリティ(循環性)とは、限られた資源や材料を無限に活用できるようにする仕組みです。このシステムの中では、太陽光や風力、水から得られる再生可能エネルギーを活用します。循環型経済へ移行することで、私たちは新たな時代の幕開けを迎えることができます。オランダパビリオンでは、自然の力を活かす革新技術を紹介します。これらのソリューションは、私たちの暮らしに大きな影響を与え、より循環型のシステムへと移行する助けとなります。かつて私たちが水の力を利用してきたように、再び自然の要素を活かすことで、持続可能な未来へと進むことができるのです。

オランダパビリオンは、アムステルダムを拠点とし、循環型建築を専門とする建築事務所『RAU』によって設計されました。



サーキュラリティと エドノミー



人間は有限な惑星における「ゲスト」であり、サーキュラリティは限られた素材を無期限に利用可能な状態に保ちます。オランダパビリオンは、数世紀前の日本における「エドノミー」からインスピレーションを得ています。約200年前、江戸は100万人近い巨大都市となり、金属や木材から紙や樹皮に至るまで、効率的な閉じたシステムの中で資源は再利用され、修理され、リサイクルされ、植林によって生態系を回復することを余儀なくされていました。この大規模な循環経済の初期例は、今日のパビリオンの完全循環型デザインに生かされ、材料やエネルギーを革新的に再利用しています。江戸と同様に、パビリオンは来場者に、廃棄物のない未来を築き、現在と未来の世代のために資源を守るうえで自らが果たす役割を見つめ直すことを促します。



パビリオンの理念



RAU architectsが行ったオランダパビリオンの設計において、1970年大阪万博のために日本の芸術家 岡本太郎が制作した「太陽の塔」が、大きなインスピレーションとなりました。岡本の作品は生命を支える太陽のエネルギーを象徴し、過去・現在・未来の「三つの太陽」を表しています。パビリオン中央の球体は、岡本の「未来の太陽」と同じ大きさで、過去の楽観主義と、私たちが「地球の客人」として果たす役割についての現代の省察とを結びつけています。1970年の希望に満ちたビジョンとは異なり、現在の未来は、気候変動、大量絶滅、そして採掘・生産・消費・廃棄という線形経済によって引き起こされる有限素材の枯渇といった差し迫った課題に直面しています。

これに応える形で、オランダパビリオンはサーキュラリティと再生可能エネルギーを中心に据えた未来志向の哲学を提示します。二つの基本的な解決策として、素材に対する循環的アプローチと、枯渇せず排出のない無尽蔵のエネルギー源を用いる方法を示し、来場者は、世界中の人々がいかに持続可能に生き得るかを探る、インタラクティブで万華鏡のような旅を体験します。協働、共有された責任、そして革新的アプローチを強調することで、パビリオンは誰もがより健全で持続可能な生き方を思い描き、現在と未来の世代のためにコモングラウンドの上で共に取り組むことを促します。

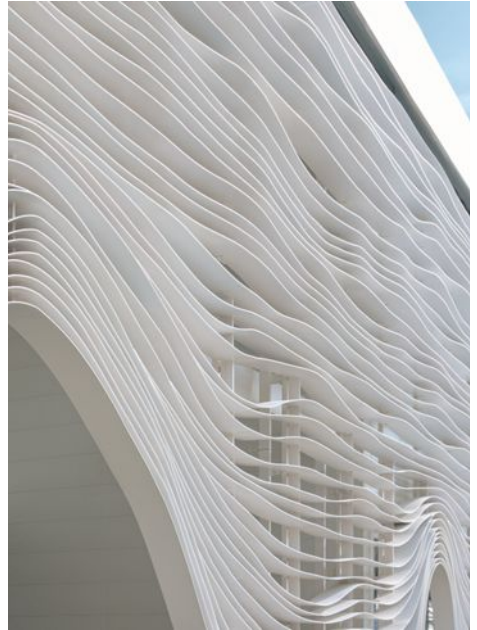


Copyright:

AND BV | Zhu Yumeng (photo 2)

マテリアルデポ

万博のパビリオンは一時的なものです。オランダパビリオンも、6か月後には解体されなければなりません。循環型経済における最高の目標は、既存の物を廃棄したり撤去したりしないことです。万博の一時的な性質を考慮すれば、パビリオンを移転させる必要があります。構造物全体、主要な構造躯体、外壁やパビリオン外装の波型ファサード、そしてすべての仕上げが、分解と再構築することを前提に設計されています。部品と材料は、接合部やネジが見える状態で、解体できるように接続されています。また、それぞれの要素には固有の識別情報があり、Madasterのマテリアル・パスポートに記録されています。万博終了後、パビリオンは解体され、輸送用コンテナに保管されます。その後、新しい場所に移設され、新たな目的が与えられます。



オランダパビリオンの セカンドライフ



万博後を見据え、オランダパビリオンの設計・建設を担った日蘭コンソーシアム AND B.V. は、持続可能性とサーキュラリティへのコミットメントを共有するパートナーを模索しました。2025年5月20日、2025年大阪・関西万博の期間中に、AND B.V. とパナソニックグループの間で、パビリオンを兵庫県淡路島へ移設するための基本合意が締結されました。このパートナーシップは、資源の再利用と転用を重視する持続可能な未来社会に向けた共通のビジョンを反映しています。

パナソニックグループの価値観は、サーキュラリティと環境責任というパビリオンの原則に密接に響き合っています。淡路島では、自然、技術、ウェルネスライフを一体で高める取り組みを進めています。オランダパビリオンの淡路島への移設により、そのレガシーは継続し、再生型デザインの実例として機能し、持続可能な実践についての対話を育てていきます。



Photo: Louis Smit

株式会社パソナグループは、人々の自立を支援し、働くことを通じて社会へ貢献する日本のソーシャルソリューション企業です。「社会の問題の解決に向けたソリューションの提供」という理念に導かれ、多様な働き方と生き方を支援しています。サービスは、人材派遣、人事コンサルティング、研修から、アウトソーシング、地域活性化、海外事業にまで広がり、個人、企業、コミュニティすべてにとって持続可能な仕組みの創出を使命としています。

同社のルーツは1976年に遡ります。創業者の南部靖之氏は大阪でテンポラリーセンター株式会社を設立しました。当時、特に主婦を中心とした女性の就労機会は限られていましたが、南部氏は、潜在的なスキルを持つ人々が再び労働市場に参入できる新しいモデルを構想しました。同年には東京へも急速に事業を拡大し、全国展開の端緒を開きました。1993年には社名を株式会社パソナへと変更し、時を経て持株会社体制の現在の株式会社パソナグループへと進化しました。この先駆的精神は、人材と社会イノベーションに対するパソナグループのアプローチを今もなお形づけています。



Photo: Louis Smit

淡路島とサーキュラリティ



新型コロナウイルス感染症（COVID-19）以降、パナソニックグループは本社機能の一部を東京から淡路島へと移し、働き方・暮らし・コミュニティを再考する機会としました。同社は島内で、文化、食、健康、教育、観光の分野でプロジェクトを展開し、持続可能な職住一体の環境構築を目指しています。自然と人をつなぐ施設を整備し、地域生産者を支援し、地域産業を再活性化すると同時に、従来の都市中心とは異なる新しい暮らし方と働き方を提案しています。

パナソニックグループにとって、サーキュラリティは単なる環境コミットメントではなく、「社会の問題点を解決する」という使命の自然な延長です。淡路島内外で、資源・スキル・機会が使い潰されるのではなく継続的に更新される仕組みの創出を重視しています。材料の再利用、施設の再生、地域産業の再構想といったプロジェクトにその姿勢が表れています。食、農業、観光、コミュニティ開発における循環の実践を推進することで、パナソニックグループは、人々の暮らしを豊かにしながら持続可能な成長を支援し、将来世代が活気あるコミュニティとより健全な地球の双方を引き継げるよう取り組んでいます。

Photo: Louis Smit

淡路島での 近年のプロジェクト



パソナグループは淡路島において、資源・スキル・機会を持続的な価値へと転換することでサーキュラリティを体現しています。2025年8月に開業した「はたけのリゾート 燦燦Villa」はその好例で、滞在施設と農地が、農業、教育、コミュニティ利用を継続的に行えるよう設計されています。2021年にオープン、2023年に移設・リニューアルオープンされた「淡路シェフガーデン」は、施設の再利用を図りつつ地域生産者を支援し、食・観光・地域活性を持続可能なサイクルでつなぎます。これらの取り組みは、パソナグループが島全体で循環の原則を実装し、人と環境の双方に意義あるインパクトを生み出していることを示しています。

「はたけのリゾート 燦燦Villa」では、建築が自然と調和し、「農とともに生きる」というテーマを体現しています。リゾートには、自然素材を用い、風景に溶け込むよう設計された、異なる建築家が手がけた11の個性的な宿泊棟があります。特に注目すべきは藤本壮介建築設計事務所による「Tower and Garden」で、同事務所は2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）の大屋根リングも手がけました。その他、芦澤竜一氏とStudioonsite による「土茅庵（月の家 / TUKI）」、ON Design Partners Inc. による「畑と窓の家（檜の家 / KASHI）」などがあり、没入型のファームステイ体験を提供すると同時に、持続可能なデザインへのコミットメントを示し、ゲストが環境と深くつながる機会を提供します。



Copyright: Pasona Group Inc.

淡路島での 近年のプロジェクト



「淡路シェフガーデン」は、既存施設を活かした空間へと転換し、食、コミュニティ、持続可能性を結びつけることで、パソナグループのサーキュラリティへのコミットメントを体现しています。2023年にリニューアルオープンし、地域食材を用いて生産者を支援し、未活用のインフラを再活性化して、料理体験、研修、イベントの拠点へと変えるプロジェクトの1つとして機能しています。生産、観光、教育を連続した循環に統合することで、「淡路シェフガーデン」は資源・スキル・機会が更新・再利用され続けることを示し、地域コミュニティと来訪者の双方に持続的な価値を創出しつつ、パソナグループの持続可能な開発というより広いビジョンを体现しています。

淡路島のオランダパビリオン



オランダパビリオンの淡路島への移設は、パソナグループの循環的アプローチが実際に機能している好例です。2025年万博を越えてパビリオンにセカンドライフを与えることで、同社はその素材、デザイン、文化的コンテンツの価値を拡張し、一時的な建造物をコミュニティと教育の永続的な資産へと転換します。これは、「はたけのリゾート 燦燦Villa」や「淡路シェフガーデン」と並んで、淡路島の各プロジェクトにサーキュラリティを組み込むという同社の広範な戦略に合致し、資源・スキル・機会が継続的に再利用・再生され、人々と環境の双方に持続可能な便益をもたらすことを保証するものです。



Photo: Louis Smit



2025年大阪・関西万博